

## 豊岡博子：藻類と出会って6年

日本藻類学会創立 60 周年、誠におめでとうございます。藻類学会で初めて口頭発表をさせていただいたのは、今から 5 年前の神戸。理化学研究所のポスドクとして、藻類の世界に入って約 1 年が経過したときでした。その時のことを諸事情あってよく覚えています。第一に、完全な私のミスで、学会最終日だった口頭発表前夜、同僚の分も含めてホテルの予約が取れていませんでした。非常に焦りましたが、幸いダブルの一部屋が空き、同僚と同室となりました。しかし第二に、その発表前夜、私は準備が万全でなく、夜中不安で眠れず興奮状態になり、ホテルの部屋で練習を繰り返しては同僚に多大な迷惑をかけてしまいました（ごめんなさい）。申し訳ないので、ホテルのロビーに移動して練習していましたが、当然のことながら今度はホテルの人に怒られました。仕方がないので、隣のボーリング場の多目的トイレで練習しました。一応納得して部屋に帰ったのが何時だったのかは覚えていません。前夜はそんな壊滅的な状態であったものの、次の日の午前中、なんとかハイテンションを保って自分の発表をやり終えました。このように自分の状態は人生最低レベルでしたが、他の方々の発表を聞くのは実に新鮮でした。そこに広がっていたのは、それまで見たことも聞いたこともない藻類たちの、純粋に“おもしろい”やカタチや現象の数々でした。藻類の世界には、まだまだ解くべき課題が溢れている。寝不足の頭でそう、うっとり感じたのを今でもよく覚えています。これが、私の藻類学会デビューです。

私は、卒業研究からポスドク 2 年目までの 9 年間、東京都立大学および基礎生物学研究所でシダ植物の光反応の研究していました。シダといっても、まずイメージに浮かぶ  $2n$  世代の孢子体ではなく、主に  $n$  世代の配偶体を使っていました。シダ配偶体は、単細胞の細長い原糸体や、一層の細胞層からなるハート形の前葉体を形成します。なぜ原糸体や前葉体を使っていたのか、一言でいうと“細胞がよく見える”からです。私は、その前葉体や原糸体に、カラーフィルターや偏光板、マイクロビームを使って光を当てて、光屈性や葉緑体の動きを見ていました。シダ配偶体を使った研究は、私にとって実にエキサイティングでしたが、大きな山を越えたとき、自然と“さあ、次に何の研究をしようか”と考えるようになりました。私は、何にこだわって研究をしていこうかと。恥ずかしながら、その答えを記したメモが残っています。“私は次の仕事場を選ぶとき、細胞がよく見える、ということにこだわりたい。生命現象を研究しているというありありとした実感が感じられるところがいい。”

そのような状態のとき、とある学会のシンポジウムで西井一郎博士のボルボックスのインバージョンの話聞く機会がありました。ボルボックス胚の細胞シートがひっくり返る様は、ダイナミックかつシンプルで、まさに私の理想の実験系でした。その約一年後、シダの研究で悶々としていた私は、西井博士にいきなりメールを書き、博士の理化学研究所のラボを訪問し、幸運なことにラボに参加させていただくことができました。これが、私と藻類の



出会いです。それからは、新しい分野でなんとか周りに追いつこうと、必死に実験をしました。その中で気づいたのは、シダ時代に培ったものが思いのほか役に立つということでした。それは、例えば細胞を見ることに対する心構えのようなものです。この実感は、研究を続ける自信になりました。藻類に出会わなければ、研究を断念していたかもしれない。私の研究人生は藻類に救われたとも言えます。

そうこうしているうち、私は娘を生みました。出産後約 3 ヶ月から私は仕事に復帰し、娘を担いで約 1 時間の電車通勤を 8 ヶ月間しました。おかげで娘は、人見知りの全くしない子供に育ち、4 歳になった今、現所属の東京大学の野崎久義先生の研究室メンバーに大変可愛がっていただいています。研究室の温泉旅行にも喜んでついてくるようになり（写真参照。左端が筆者。）、母は早々に寝ましたが、娘は夜遅くまで学生さんとゲームを楽しんでいたようです。

今私は、群体性ボルボックス目を使って有性生殖の研究をしています。同型配偶、異型配偶、卵生殖という有性生殖様式の各進化段階を含む群体性ボルボックス目は、有性生殖の進化を辿れるモデル系統群として、非常に魅力的です。今は同型配偶ゴニウムの配偶子を日々扱っています。まだまだ手探りの状態ですが、ゴニウムの配偶子もまた、こちらが真剣に問えば、明確な答えをいつも返してくれる、私にとって素晴らしい研究材料だということを実感する日々です。

最後になりましたが、上記のように陸上植物の世界から藻類の世界にやってきた私は、藻類学会を通じて多くの素晴らしい方々と出会うことができました。その方々に支えられて今も藻類の研究を続けられていることに、深く感謝致します。今後の学会の益々の御発展をお祈りすると共に、私も日々真剣に藻類と向き合うことで、藻類研究の発展に貢献していきたいと考えています。

(東京大学大学院理学系研究科)